福岡市

板屋・今津遺跡

—道路新設工事に伴う埋蔵文化財調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第166集

1987

福岡市教育委員会

板屋・今津遺跡正誤表

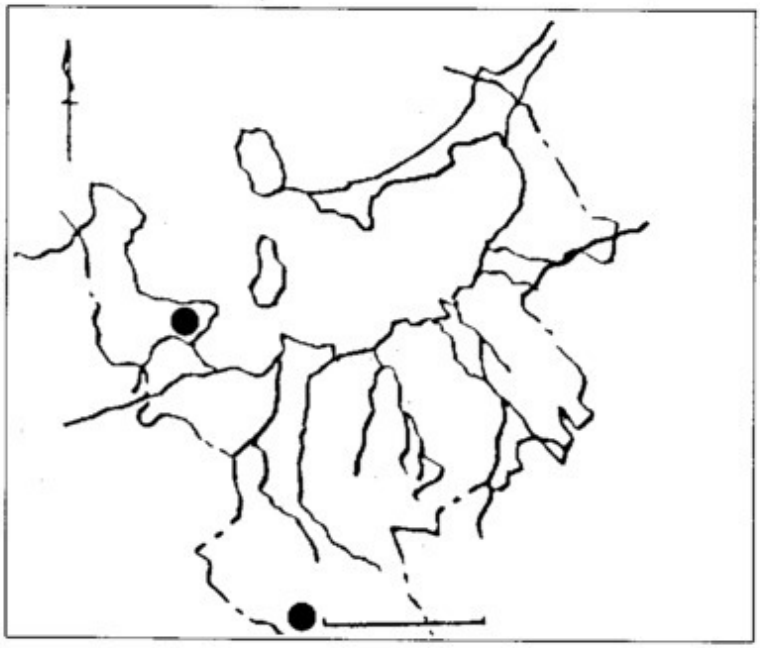
P数	行	誤	正
3		Fig.2(縮尺1/200,1/100)	Fig.2(縮尺1/200,1/50)
5		Fig.3の遺物番号は8桁(85240002)であるが、これは誤である。正しくは9桁(852400002)で、2～10も同様。	
16	15	口径11.2cm,器高2.2cm	口径6.6cm,器高2.2cm
	16	4は、A区	5は、A区
	18	5は、A区の遺構	4は、A区の遺構
	20	29は、SE-01から	13は、SE-01から
	22	7は須恵器の蓋	9は須恵器の蓋
	22	8は高台	10は高台
	23	9～11はC区	7.8.11はC区
	23	9は甕形土器	7は甕形土器
	24	10は甑の把手	8は甑の把手
	26	玄武岩は砥石	玄武岩が砥石
	27	13,14はC区包含層	14,15はC区包含層
	27	13は折断	14は折断
	27	15～17はC区	17.18はC区
	28	18はSD-04	19はSD-04
	30	Fig.10-19～21は	Fig.10-20～22は
17 18		Fig.9.10の遺物番号は85250001の8桁であるが、これは誤で、9桁(852500001)が正しい。	
19	1	22はB区SD-04	23はB区SD-04
	2	23も22と同様	24も23と同様
	4	24～26までは	25～27までは
	4	25の表面は	26の表面は
	7	24は復元半径	25は復原半径
	9	26は表面が	27は表面が
	9	27,28はSD-04	28,29はSD-04
	10	27は非常に堅く	28は非常に堅く
	11	28は重要な所	29は重要な所

福岡市

板屋・今津遺跡

—道路新設工事に伴う埋蔵文化財調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第166集



1987

福岡市教育委員会

序　文

本書は，土木局道路計画課が計画立案し，教育委員会が行った，埋蔵文化財事前調査の報告書です。教育委員会では昭和60年８月から板屋の調査，10月から今宿自転車道の発掘調査を行ないました。

調査の結果，板屋遺跡からは縄文時代早期の溝状遺構等が検出され背振山附近にも縄文時代の人々が生活していたことが判明しました。また今津遺跡では鎌倉時代に栄西によって開山された誓願寺の附近を通ることとなり，僧坊の調査を目的として開始しました。その結果，井戸二基，溝等が検出されましたが直接僧坊の址は発見できませんでした。しかし鎌倉時代から現代までつづいている誓願寺の歴史を明らかにすることはできました。

本書はその事実を報告するものです。本書が埋蔵文化財への理解を深める手助けと併せて研究資料として活用していただければ幸いです。

調査から出土遺物の資料整理に至るまで指導委員の先生をはじめ多くの方々に御協力をいただきましたみなさまに心から感謝いたします。

昭和62年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐　藤　善　郎

例　言

1．本書は，早良区板屋における道路新設工事に伴う事前の埋蔵文化財調査と，西区今津における今宿自転車道新設工事に伴う事前の埋蔵文化財調査の報告書である。

2．事業は福岡市土木局道路計画課からの調査依頼を受け福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係が発掘調査，資料整理，報告書作成を行った。

3．報告書作成は，二宮忠司と補助員の加藤元信，田中稿二，大庭友子，藤村佳公恵が行った。事務は岸田隆が担当した。

4．本書の執筆は二宮が行ったが，挿図は加藤，田中，藤村が行い，写真撮影は大庭が行った。

5．縄文土器の拓影は，田中，斉藤美紀枝，尾崎京子，真名子順子が行った。

6．本書の編集は二宮が行った。

7．遺構名は記号化し，ＳＤ→溝，ＳＫ→土坑，ＳＥ→井戸，掘立柱建物→ＳＢと呼称した。

8．板屋遺跡の調査番号は8524，遺跡略号，ＩＴＡとし，福岡市分布地図番号は早－８，今津遺跡は調査番号8525，遺跡略号はＩＭＢ，分布地図番号は118－Ａ－２である。

9．発掘調査によって出土した遺物，遺構遺物の図面，写真等の記録類は整理しだい埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。

本 文 目 次

板屋遺跡

第１章　１．はじめに……1

１．調査に至る経過……1

２．調査の組織と構成……1

第２章　調査の記録……2

１．調査概要……2

２．遺構……2

３．遺物……4

今津遺跡

第１章　１．はじめに……7

２．調査の組織と構成……7

３．立地と環境……9

第２章　調査の記録……11

１．調査概要……11

２．遺構……12

３．遺物……16

小結　……19

挿 図 目 次

Fig. 1　板屋周辺地形図……（縮尺 1/50,000）……Ⅵ
Fig. 2　遺構配置図ＳＤ－01土層図……（縮尺 1/100, 1/200）……3
Fig. 3　土坑・遺物実測図……（縮尺1/2,1/4,1/40）……5
Fig. 4　今津周辺地形図……（縮尺 1/50,000）……6
Fig. 5　遺跡分布図……（縮尺 1/8000）……8
Fig. 6　遺構図ＳＢ－01, 02実測図……（縮尺1/40,1/80,1/160）……10
Fig. 7　今津井戸・井戸状遺構実測図……（縮尺 1/40）……13
Fig. 8　Ａ・Ｂ区溝状遺構……（縮尺 1/80）……14
Fig. 9　今津出土遺物……（縮尺 1/2, 1/4）……17
Fig. 10　今津出土瓦実測図……（縮尺 1/4, 1/6）……18

図 版 目 次

P.L.－1　1　板屋調査開始前の全景　　2　遺跡全景
3　ＳＤ－01全景　　4　東壁土層状態
5　ＳＤ－01土層状態　　6　ＳＤ－01土層状態

P.L.－2　1　板屋遺跡出土遺物　　2　今津遺跡遠景
3　今津遺跡遠景　　4　今津滑石原産地遠景
5　今津滑石原産地近景

P.L.－3　1　今津Ａ区全景　　2　今津Ｂ区Ⅱ全景
3　今津Ａ区溝　　4　今津Ｂ区Ⅰ全景
5　今津Ａ区全景

P.L.－4　1　ＳＥ－01遺物出土状態　　2　ＳＥ－01土層
3　ＳＥ－03検出状態　　4　ＳＥ－01完掘状態
5　Ｃ区全景　　6　Ｃ区Pit 検出状態

P.L.－5　今津遺跡出土遺物

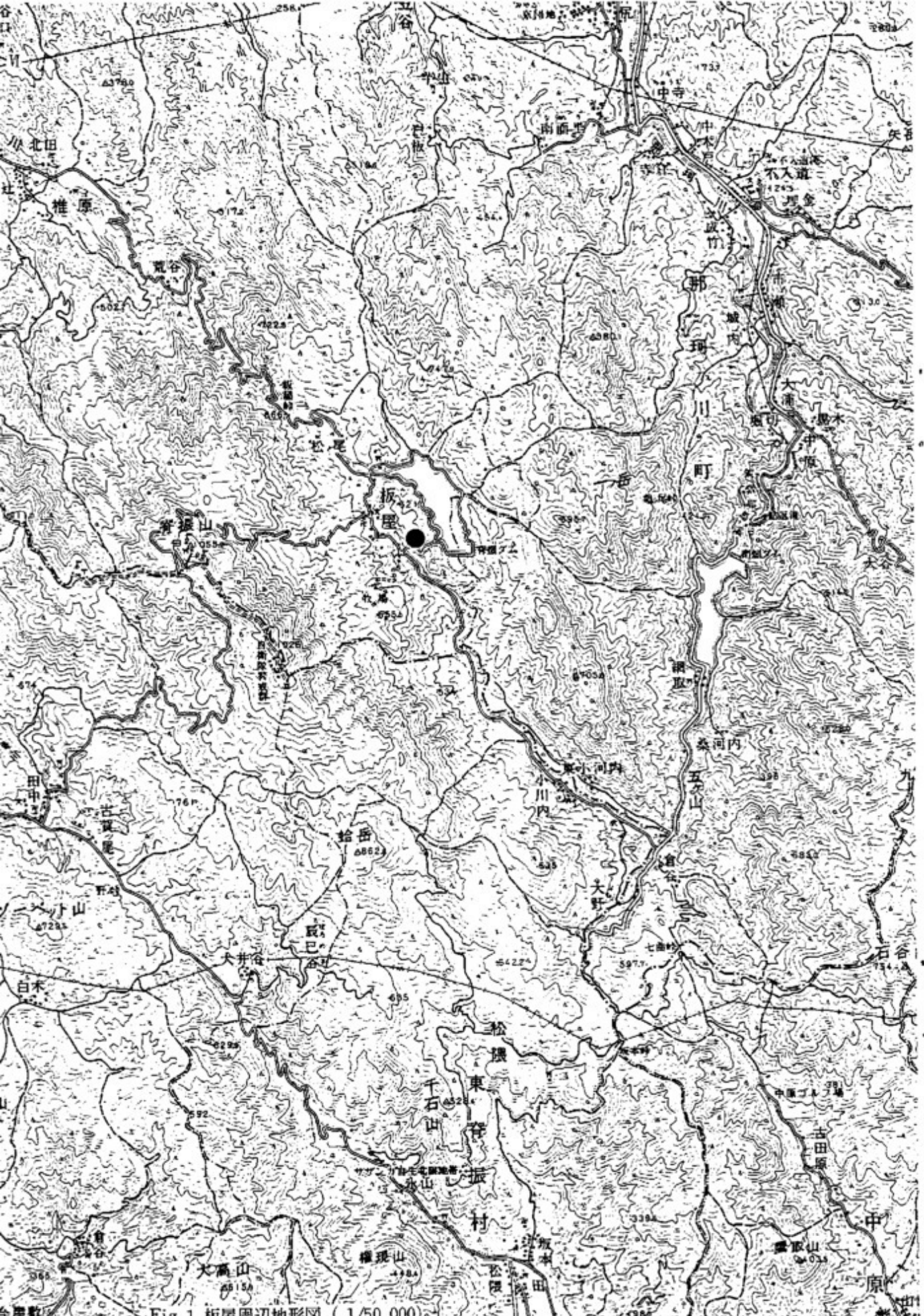


Fig. 1 板屋周辺地形図 (1/50,000)

板屋遺跡

第1章　はじめに

1.　調査に至る経過

福岡市土木局道路計画課より福岡市早良区大字板屋地区に道路新設の申請が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。これを受けて昭和59年6月14日に事前審査班による試掘調査が約3,000㎡を対象に行なわれた。申請地は狭い谷間に立地し，試掘前の現地踏査で黒耀石の剥片が採集されたりしている。試掘は平坦地に3本のトレンチを南北に入れ，土層，遺構の確認を行なった。申請地が棚田に開田される際の著しい削平を受け，包含層及び遺構検出面は対象面積の3分の1程度となった。試掘調査の基礎データーにより調査区を設定し，土木局との協議により昭和60年8月25日より同年9月30日を本調査と設定，実施した。

2.　調査の組織と構成

調査委託　　福岡市土木局道路計画課
調査主体　　福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係
事務担当　　折尾学（係長）岸田隆
調査担当　　二宮忠司
調査・整理補助
　　田中稿二，加藤元信，山村信栄，大庭友子，藤村佳公恵
整理・調査作業
　　太田孝房，鬼丸邦宏，北島義浩，三原淳司，藤崎一寿，山野訓弘，尾崎京子，北島藤子，斉藤美紀枝，真名子順子，吉柳恵子，清水文代，杉村文子，西納テル子，西納トシエ，中牟田サカエ，能美八重子，真鍋チエ子，藤タケ，山下サノエ，米嶋ハツネ，太田頼子，有吉千栄子，清水裕子，平田ミサ子，南里三佳，藤崎洋子

遺跡の立地と環境

背振山(1055m)から東西に派生する500～800mの山麓は，西は雷山，東は油山までつづく。背振山には，平安時代の末法思想から発展する経塚(経筒)が発見され，また山岳信仰の対象としても有名である。この背振山から東に板屋峠(666m)がある。これより標高約100m下った

ところに板屋地区がある。東に背振ダムがあり，西には背振山からの南側斜面がつづき，平面と呼べる面はほとんどなく谷へとつづく。背振山の南側斜面であるがむしろ600～800m程度の山々にかこまれた盆地であり約2kmほどで佐賀県東背振山村である。この地区は分布調査で，まったく遺跡が発見されていなかったが，これは分布調査期間が冬であったことも遺跡の確認をできなかった要因である。

今回の試掘調査前の踏査で黒耀石剝片等が採集されているが，調査時にも田畑を表面採集すると青磁，白磁片等も採集されているところから周辺部の遺跡の確認も必要であろう。

試掘調査でも包含層を確認(縄文時代早期の時期)しているところから斜面部分だけに包含層が残存し平坦部附近は削平を受けたものと思われる。

第2章　調査の記録

1．調査概要

土木局との協議で昭和60年8月25日より同年9月30日の約1ケ月間を調査期間とした。試掘調査の結果，最も残りのよい1,000㎡を対象に調査を開始したが，盛土等の関係で調査面積は，800 ㎡となった。遺跡は西から東へ傾斜し，又北から南にわずかな傾斜を持つ。西から東へ階段状に3つの段を持つ。本来は自然な傾斜であったものを開田のため西側を削平し平坦面としているために東側部分だけに包含層が残る状態であった。特に3段目では包含層が10～15cm程を堆積している。これと反対に1段目ではほとんど包含層が確認できず2段目で東側に一部認められる程度で1，2段目とも遺構がかなり削平を受けていることが判明した。

2．遺　　構

削平が著しいため，1段目，2段目は20～50cm程度は削平されていると思われる。Pit 等でも20～30cm程度の深さが最高である。土層は，耕作土，床土の下にすぐ暗褐色土(包含層)と遺構面の地山である明黄褐色粘質土(礫混り)が直接検出された。特に1段目では地山の明黄褐色粘質土が耕作土下にある状態である。3段目では暗褐色土(包含層)が10～15cm堆積し，同層が遺構内に堆積している。

このような状態で遺構の検出は第3段目が中心となった。1段目，2段目にも少数ではあるがPitの検出をみた。しかしその数からは3段目の比ではなくそのほとんどが削平されたと考えられる。遺構としては西北部の1段目から検出したＳＤ—01，これは1段目の西から北へ進

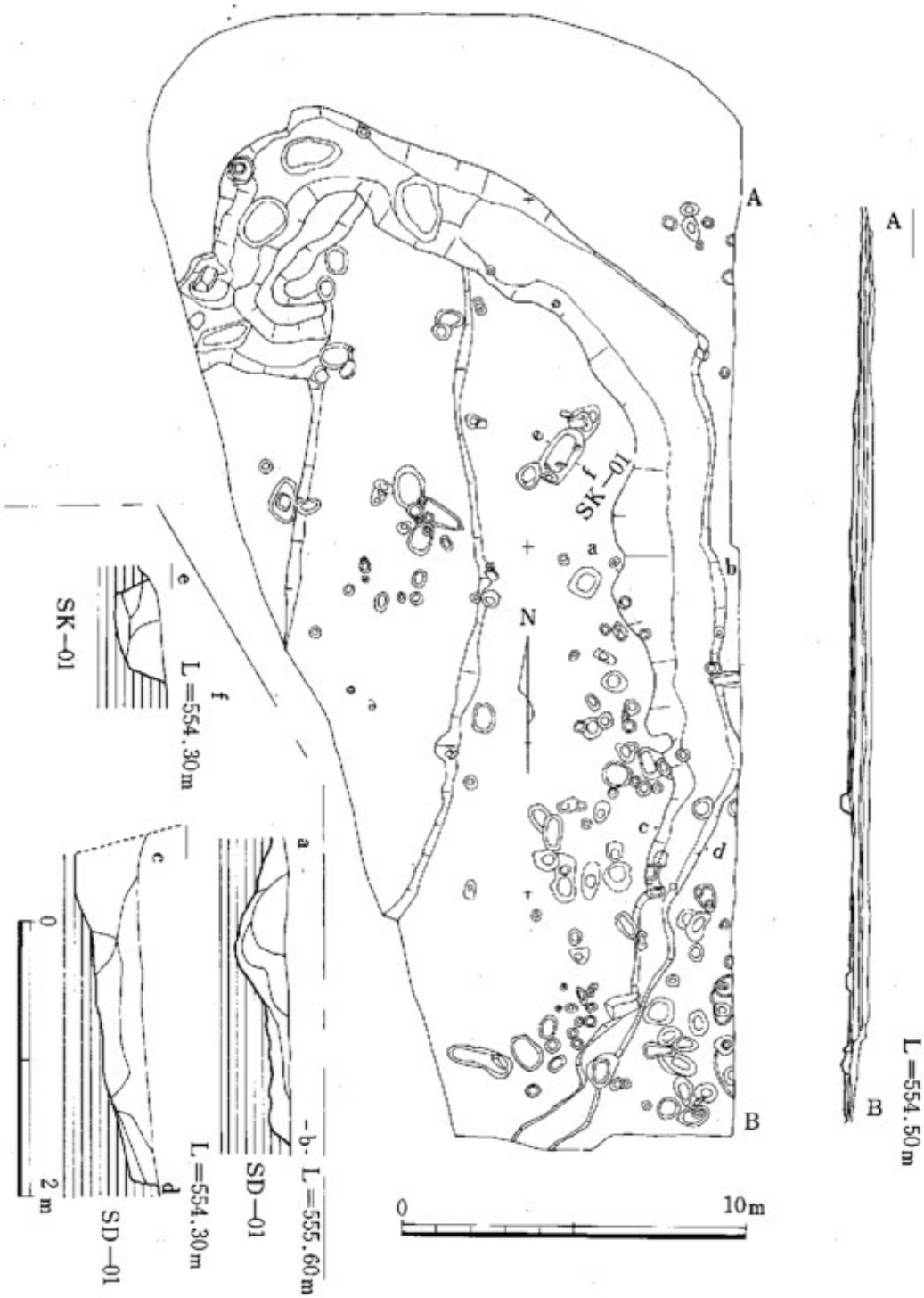


Fig. 2 遺構配置図・SD－01土層図（縮尺 1/200・1/100）

み約5m程度で東へまがる。調査区の北東で南に方向をかえてそのまま進む形状である。Fig, 2, a～b, c～dがその土層図であるが, 土層上は全体的に同一状態を観察できた。SD—01で南側中央部が一番深く南側に行くほど浅くなる。出土遺物はFig, 3—2～5の土器で縄文早期押型文等が出土している。

SK—01

土坑状遺構である。Fig—3—1に図示したごとく土坑墓とは考えられないが, 石と混じって土器細片や黒耀石剥片が出土したが, サルのイタズラによってこの土器, 石器が紛失してしまった。SD—01と同じ縄文早期の楕円押型文であることから人意的な土坑である。

Pit群

第3段目の南側より数多くのPitが検出した。人意的な柱穴と礫の抜き痕があるが図示したものはほとんど人意的なもので, 多くのPitに細片であるが土器の出土を見ることから人意的と考えた。しかしながら削平が著しいためにPitのもつ意味が不確定である。

遺　物

遺構からかなりの細片土器が出土したがどれも図示できるものはない。かろうじてFig 3—2～5の土器が図示できたにとどまる。6～10は試掘調査の際に包含層中より出土した土器, 石器である。

2は口縁下の部分である。楕円押型文の施文は右から左下へ回転していく方向を示している。二重に重複している部分から約3～4cm単位と考えられる。3も同様の楕円押型文であるが2より楕円が大きく凹凸もはげしく, 一見格子状を呈するなど整っている。4も同様の楕円押型文であるが, 2, 3より円が長く米粒状を呈する。5は貝殻条痕文土器である。

6～10は試掘による遺物であるが, 同遺跡内出土であるためここに図示した。

6, 7は同一個体と思われる。表面色度が異なるが同じ施文方法であるためと6が口縁部, 7が底部近くで, 出土地点もほぼ同一であることから同一個体と考えておきたい。

口縁部は貝殻腹部による押圧文を3条交互にほどこしその下端に山型の貝殻条痕を施文する。

下に押圧文を加える文様形態を示すが押圧文, 山形条痕が二段に施文されている。口唇部にも波状に押圧した痕跡を持つ。8はサヌカイトの削片石器である側辺部に使用痕が認められる横剝ぎの剝片を利用したものでパテナは進んでいる。9もサヌカイト剝片である。下端を折断している。主要剝離面側に二次加工が認められる。9もパテナが進んでいる。10はサヌカイトの石核である。一部に自然面を有するが表面からの剝離よりも背面からの剝離が主だったことを物語っている。表面は打面の役割を果していたものと思われる。背面の下端からの剝離は調整面であり剝片のstep-flakingをふせぐ役割を持つものと考えられる。

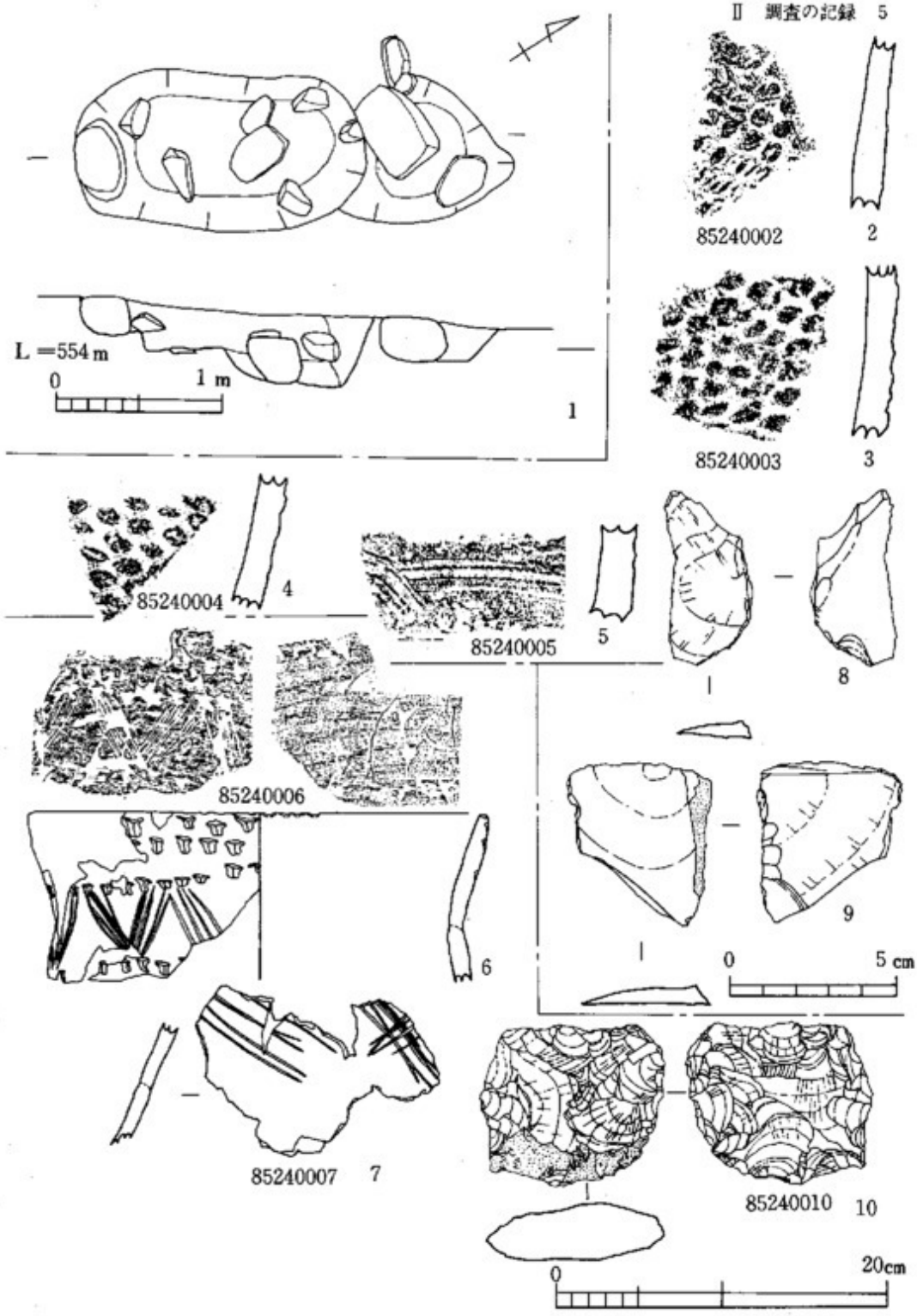


Fig. 3 土坑・遺物実測図（縮尺 1/2, 1/4, 1/40）

Fig. 4 今津周辺地形図（1/50,000）

今津遺跡

Ⅰ はじめに

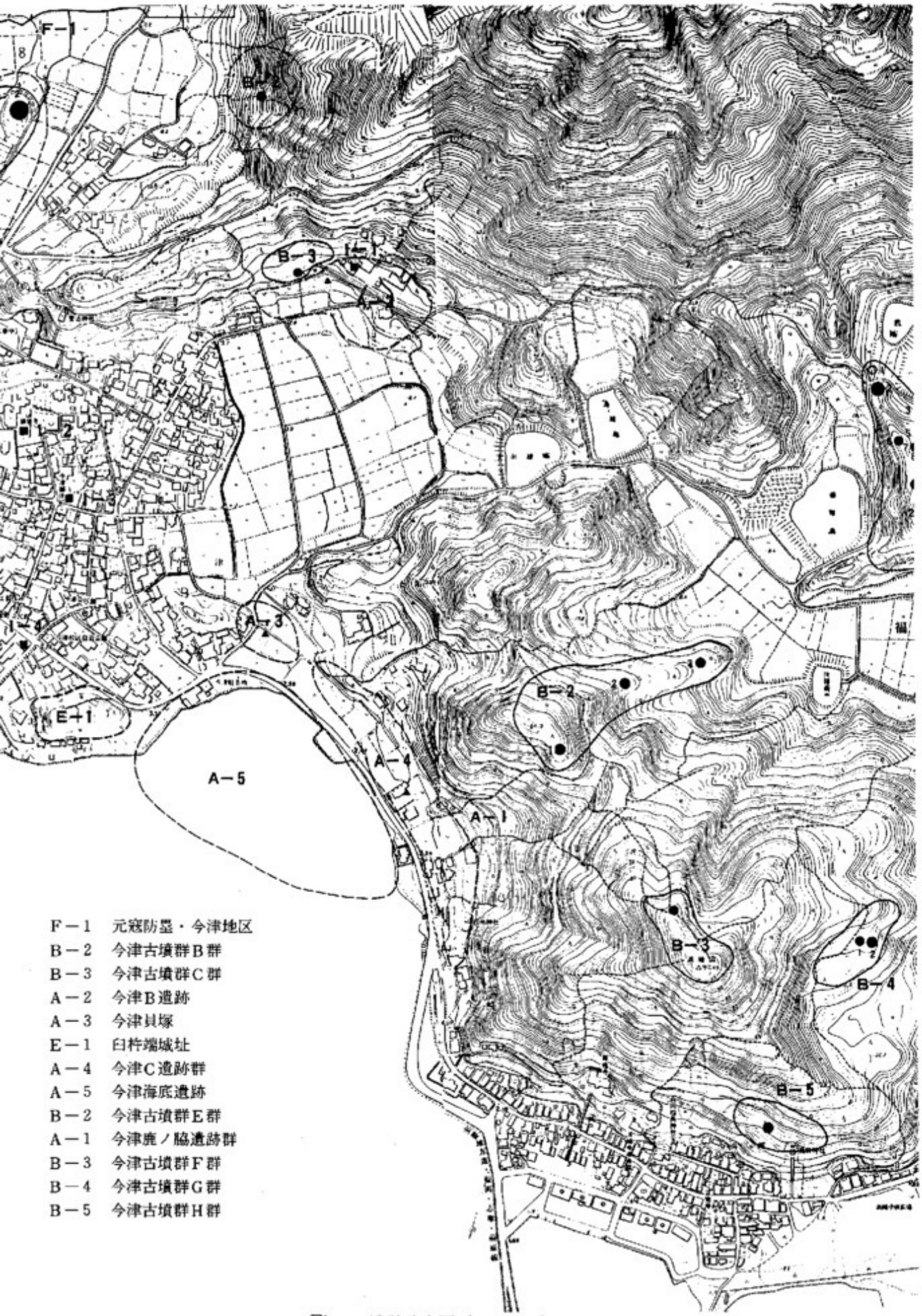
1. 発掘調査に至る経過

福岡市土木局道路計画課が数年来進めている今宿自転車道新設工事に伴なう調査で，昭和56年以降事業が進行中である。昭和59年度に昭和60年度工事予定計画書が提出された。今回の工事部分は全長540m の3,300㎡で，路線内に今津古墳群C群や今津B遺跡等が確認されている所である。このほかに僧坊42房を有した誓願寺が所在している。また周辺部には今津貝塚，今津海底遺跡，臼称端城跡や今津元冠防塁等がある。このため昭和59年５月に事前審査班によって試掘調査が開始され予定路線で遺構検出が行なわれた。

このデーターをもとに道路計画課と協議し，昭和60年10月１日より同年11月15日を調査期間として設定，実施した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	福岡市土木局道路計画課	福岡市長　進藤一馬
調査主体	福岡市教育委員会	教育長　佐藤善郎
		文化部長　河野清一
		埋蔵文化財課長　柳田純孝
事務担当	折尾学(係長)，岸田隆	
調査担当	二宮忠司	
調査，整理補助員	田中稿二，加藤元信，大庭友子，藤村佳公恵	
整理，調査作業員	青柳恵子，有吉千栄子，尾崎京子，太田頼子，北島藤子，斉藤美紀枝，平田ミサ子，清水裕子，南里三佳，藤崎洋子，真名子順子，太田孝房，鬼丸邦宏，清水文代，杉村文子，中牟田サカエ，西納テル子，西納トシエ，能美八重子，真鍋千栄子，藤タケ，山下サノエ，米嶋ハツネ	



F－1　元寇防塁・今津地区
B－2　今津古墳群B群
B－3　今津古墳群C群
A－2　今津B遺跡
A－3　今津貝塚
E－1　臼杵端城址
A－4　今津C遺跡群
A－5　今津海底遺跡
B－2　今津古墳群E群
A－1　今津鹿ノ脇遺跡群
B－3　今津古墳群F群
B－4　今津古墳群G群
B－5　今津古墳群H群

Fig. 5 遺跡分布図（ 1/8,000)

3.　立地と環境

今津は，糸島半島を北流した瑞梅寺川が博多湾に注ぐ河口に位置し，博多湾の中でも内陸湾と考えられる。山々は100～200m程度の小山麓が可也山のふもとからつづき，東に毘沙門山を最後にして博多湾にそそぐ。毘沙門山，今山は玄武岩の産地としてよく知られているが，もう一つ松尾山も玄武岩を産する。この３つの山々は三群変成岩で形成されている。これは福岡市の中でも最も古い地層である。このような低い山麓がつづく中で平坦面はごくわずかで瑞梅寺川から運ばれる肥沃な土によって河口附近は低湿地帯となっていた。博多湾の中でも内陸湾である今津を仮称して今津湾とすると，この今津湾を利用し，かつ生活の場として古代人に利用されてきた。古代にはかなり奥まで湾が進入していた様で縄文時代後期には桑原に飛櫛貝塚，元岡に瓜尾貝塚がある。弥生時代になると湾に近い所で生活していた様で，長浜貝塚，今津貝塚が形成されている。内陸部には志摩支石墓や今宿五郎江（昭和60年度に調査された志摩・前原一福岡線の道路新設工事に伴う発掘調査で弥生時代中期～後期にかけての遺構，この遺跡より船が出土している。この部分は，ラグーン地帯であったため船が必要であったと思われる。）のように銅鐸型銅製品を持つまでに至った地域や三雲のように小国家として権力を持つ地域もある。平安時代・鎌倉時代・室町時代になると博多津から今津津（港）の宋船の貿易港として多いに繁栄し，誓願寺やその他の地域も多いにうるおったことになる。古代の今津港はどの位置になるのであろうか。一説には今津小学校附近とも言われている。もう一説は誓願寺のすぐ下方の浦ノ前，宮ノ脇，鹿ノ鼻の字名で残る部分である。『今津』の中で柳田純孝は「誓願寺の下を前田といい，その南側に浦ノ前という字がある。この浦ノ前を当時の港として想定してみると字城から字宇崎にかけては入江のように内湾しており，その中央が浦ノ前となり，浦ノ前の北側高台に誓願寺が位置することになる。……後略」とし，宋船の出入した港の推定地を上げている。この宋船がもたらした文物は，この周辺部にも多大な影響を与えている。今宿五郎江でも青木遺跡でも同時代の掘立柱建物とともに青・白磁や宋銭等が出土している。

このように今津は古代から港としての役割とともに宋船の影響により博多津と同様に多いに繁栄し他の地域に与えた影響はかなり大きかったものと思われる。

その後，1274年の文永の役（蒙古襲来）と元冠防塁施設整備で各大名等が今津をおとずれている。文献史学の中で記録されているものが昭和43年度の発掘調査で明らかとなり石組の相違で各大名の持分が明らかとなった。これは文献と考古学の関連学問が一体となったことを証明するもので，文献のたしかさをも明らかにした例である。

このような歴史的環境の中での誓願寺の位置付け，今津港の実態が少しづつ明らかになりつつある。

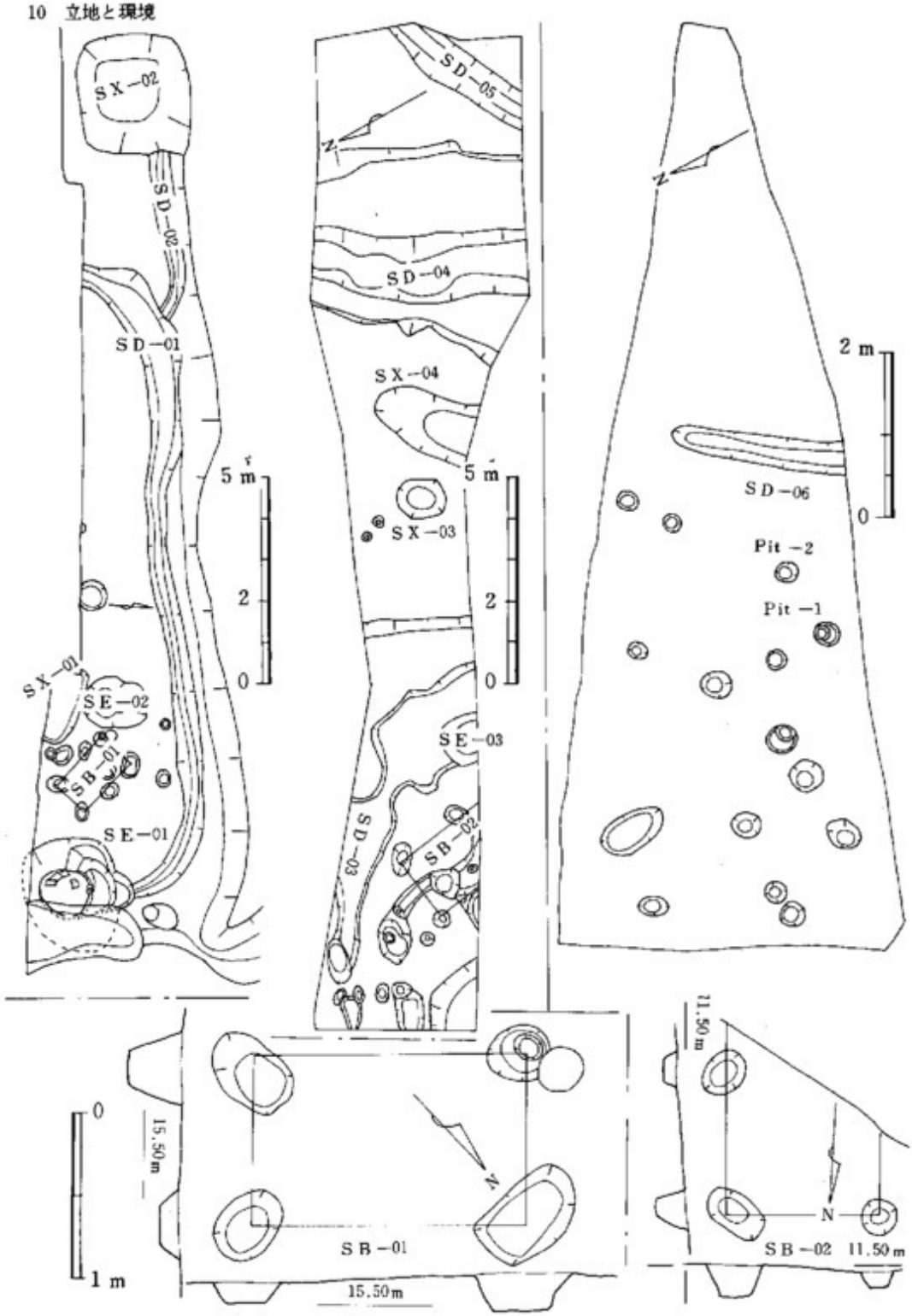


Fig. 6　遺構図 SB −01, 02実測図（縮尺 1/40, 1/80, 1/160）

第2章 調査の記録

1. 調査概要

申請地は毘沙門山の南側山麓に位置し，特に安元元年(1175年)に建立されたとする誓願寺のすぐ下方を通るため，僧坊の痕跡を調査することを第1の目的とした。またこの地には数多くの玄武岩露頭地調査前の踏査で確認できている所から今山に類似する弥生時代の石斧製作址の痕跡を明らかにすることを調査目的とした。誓願寺は，怡土の豪族，仲原氏の娘の願いによって創建されたとする。禅の始祖栄西が書いた「誓願寺盂蘭盆縁起」は国宝に指定されている。この時，僧坊42坊を建立したとされ，現在でも字名でそのなごりを残すものがある。例えば寺小路，大日坊，坊頭正権院などがあり，又中国船の往来で港として大いに繁栄したため，同様のなごりを持つ字名，長浜，口戸，開戸口，白浜等がある。又，路線内上部に今津古墳群C群が所在するため古墳時代の遺構検出をも目的として昭和60年10月より発掘調査を開始した。

路線幅が3～5mと狭いため調査としても試掘トレンチの拡張程度で遺構の全体を明らかにすることはできなかった。遺構としてA区より斜面を造成し平坦面を作り出し，溝を掘りめぐらした遺構や，井戸，Pit 等が検出された。B区は現在の誓願寺のすぐ下に位置しているため何らかの遺構を期待したが，井戸1基と溝，Pit 等検出したにとどまった。C区は山裾の為，遺構の検出は無理と思われたが，流土の堆積が厚く，約250㎝程度を掘削して遺構面に達した。主なる遺構は，古式土師式土器を出土するPitと溝状遺構のみの検出であった。掘立柱建物の柱穴とも思われるPitがあるか確定できなかった。主なる目的である僧坊跡は明確にすることはできなかったが，その一部の井戸や溝等の発見によって少しは明らかになる部分があると思われる。この調査地点は字名を正権院といいこの大正10年に古銭が多量に出土し24枚を東京帝室博物館(現在の東京国立博物館)に寄贈している。またこれとは別に人骨とともに陶磁器が完形で100点を越す量が出土している。これらは今津港，及び誓願寺に大いに関連する事例で今津港が栄船の出入りの貿易港であったことなどが上げられる。このように歴史的背景を持つ今津と誓願寺の調査で少しでも明らかにすることを目的として調査を開始したが何分調査面積が少ないことなどから十分に解明する事ができないまま11月15日をもって終了した。しかしその中で滑石の原産地(露頭面)を発見できたことは弥生から中世石鍋等の石鍋製作があった可能性を発見したことは一つの成果であった。

2. 遺　構

A区，B区，C区の3地点でそれぞれの遺構を検出した。A区，B区では同時期の遺構，C区では古式土師器出土する溝，Pit 等を検出した。各区ごとにそれぞれの遺構を記してみたい。

A区の調査

A区では井戸，井戸状遺構，溝，掘立柱建物，意味不明の土坑，Pit等が検出された。特に北側部分はかなり急激な斜面であるが，この部分を削り落として造成し平坦面を形成している点が注目される。

溝，（SD—01，02）

SD—01は造成面のすぐ下端に東西に長く張りつく状態で掘り込まれており，その深さは浅いが傾斜にそって作り出土されているためその役目は十分に果している。SD—02はSD—01から流れ込む形状を示し，SD—01が弧を描きながら南に落ちていくのに対して，SD—02は東西の裾部にそってつづき大きな不明土坑内へ流れ込む状態を示す。（Fig，8），SD—01は両左右が弧を描きながら南側に延びるが東側部分ではSE—01に流れ込む状態を示している。調査時期は建物の雨落ち溝とも考えたが柱穴及び礎石らしき石や抜痕的痕跡もみあたらないので造成面における排水溝と考えた。しかしながら左右が南に曲がることから考えて建物の区画溝の可能性ものこる。SD—02はSD—01より浅いが不明土坑部分（SX—01）では深くなり，むしろSX—01に流れ込むのかもしれない。遺物はSD—01から高台付椀の破片が出土したが，図示はできなかった。このほかにFig，9—8の土師器椀が出土している。SD—02からは土器等の出土は認められなかった。

掘立柱建物（SB—01）

中央部より東側に一群のピット群がある。この中で一棟建物と考えられるものが検出した。Fig.6—4に図示したものであるが1×1間の配置となっている。しかしこの柱間の間隔は狭すぎるため，おそらく1×1間以上の建物配置であろう。

井戸，井戸状遺構，（SE—01，02）

SE—02は大きなPit状であるが他の柱穴より深いため一応井戸状遺構とした。またSX—01も井戸としての可能性を考えたが，これはあまりにも大きすぎて，底面が皿状を呈するために不明土坑とした。SE—01は3段掘りとなる形状を示し，中央部に平瓦が3枚配列してあった。このほかにも丸瓦や平瓦の破片が出土している。接合すると底面にある平瓦と同一個体のものなど出土している。瓦のほかには他の遺物は出土していない。形状は円形を呈し径2.8m，深さ1.15mを計る。

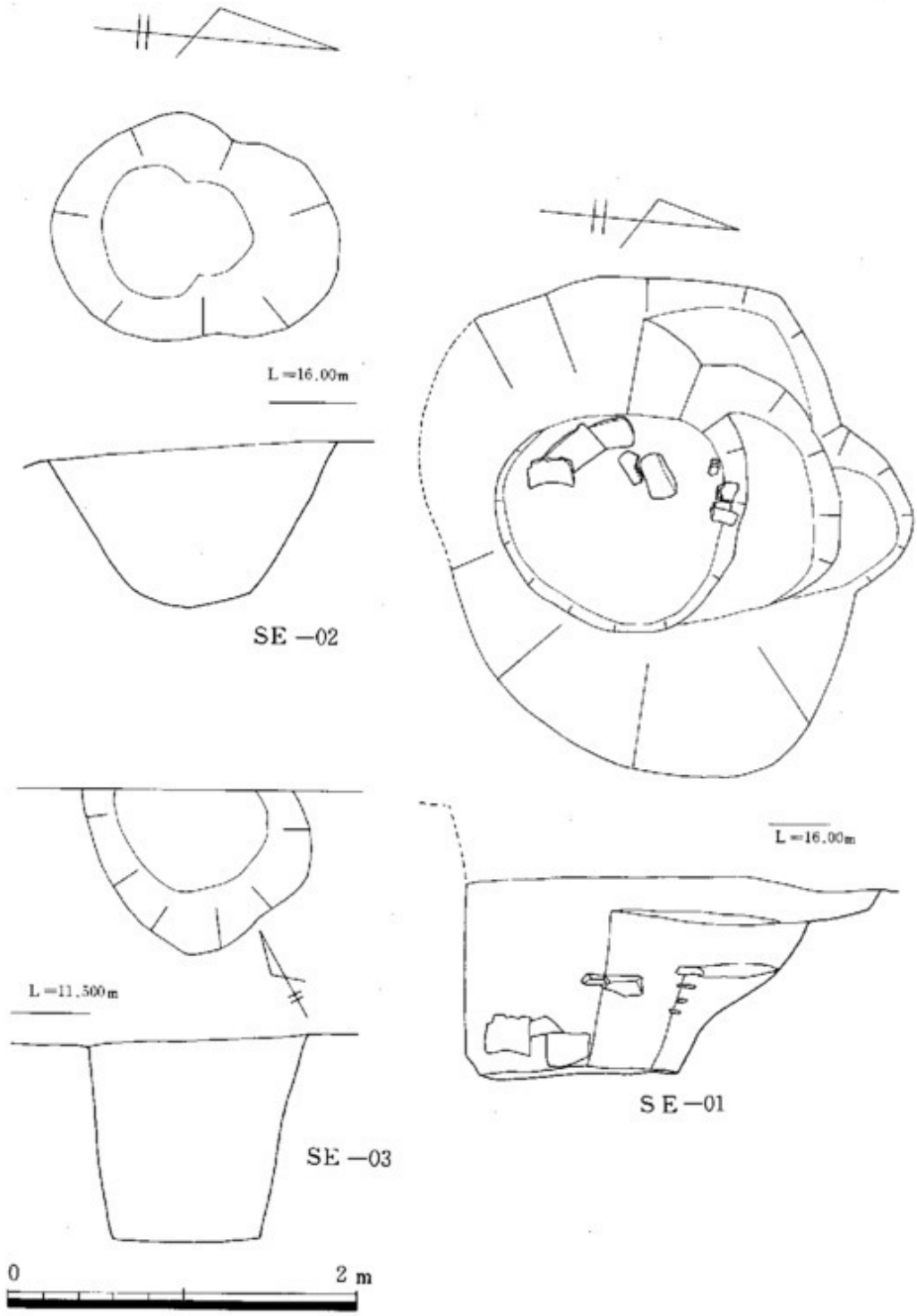


Fig. 7　今津井戸・井戸状遺構実測図（縮尺 1/40）

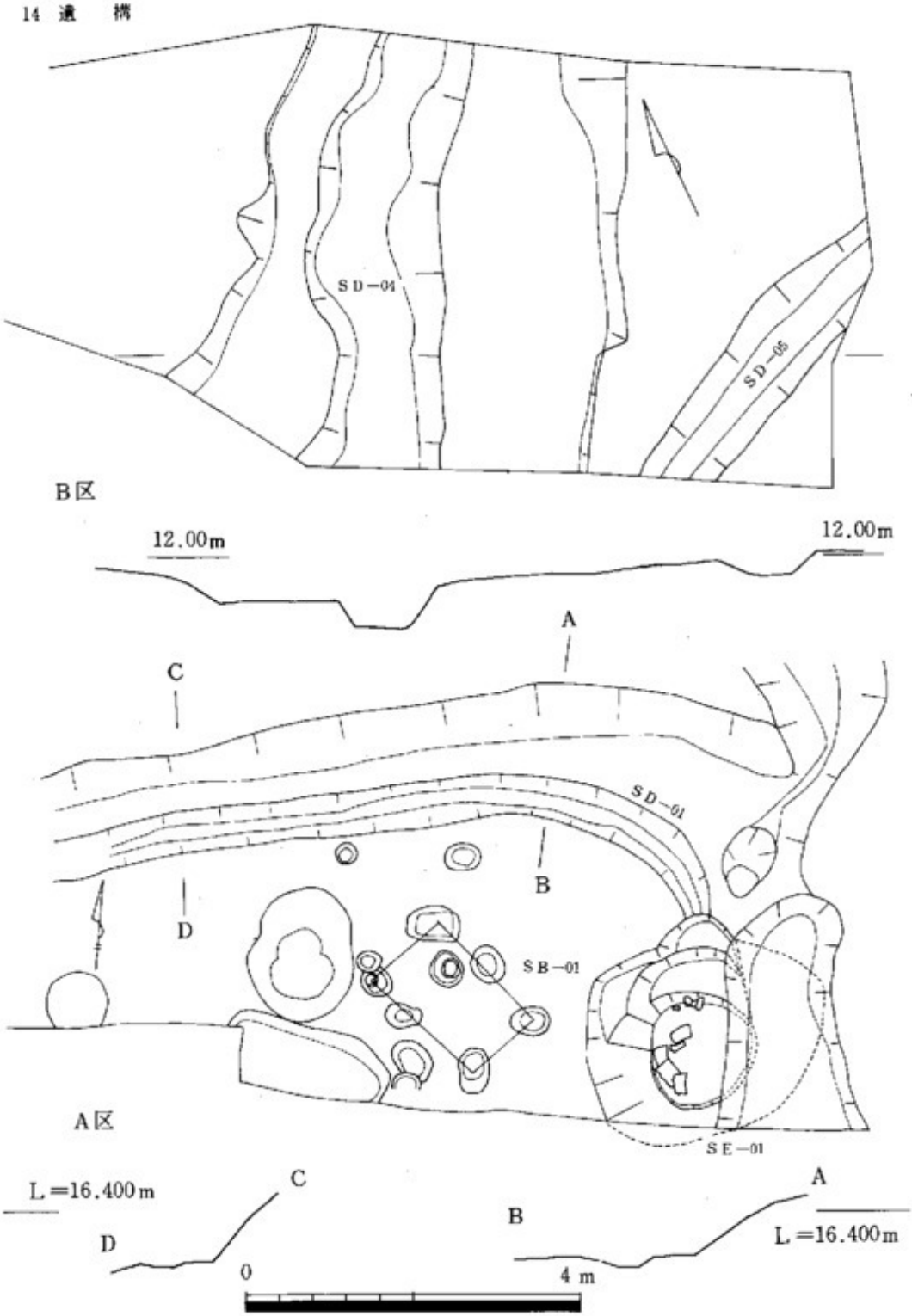


Fig. 8　A・B区溝状遺構　　(縮尺 1/80)

B区の遺構

大泉坊誓願寺の南側斜面の調査であるため遺構の確認は無理と思われたが、意に反して溝状遺構3条，井戸1基，不明土壙2基，掘立柱建物1棟，多数のPitを検出した。

溝状遺構（SD－03～05）

調査の幅が狭いためその前後の状態は判断できないがＳＤ－03は斜面からの方向とそれを横切る状態がある。ＳＤ－03の内にＳＥ－03があり前後関係は，ＳＥ－03がＳＤ－03を切る状態を示している。幅は広い所で約2ｍ，深さは平均で50m と浅い。斜面から流出する水の溝と考えられる。ＳＤ－04は斜面方向に直角に向っている。水の流れは北側から南側に流れる。上段部分は後世の溝で巴瓦や平瓦等の破片が多量に破棄された状態であった。SD－04からは土器，瓦等が出土している。Fig. 9－8，18 Fig. 10－24，25，26である。　このほかにも図示しなかった土器もある。この中で Fig. 9－18の鬼瓦は部分ではあるがかなり大きなものであろう。図示した中に都地館跡の周辺部から発見された鬼瓦をスケッチしているが，これは同様なものという意味だけで同一のものではない。一部分であったため分りやすい様に図示しただけである。ＳＤ－04の幅は0.8m，深さ0.7m を計る。

ＳＤ－05はＳＤ－04より高い位置にある。北東から南西へ流れを持つ。出土遺物は細片のため図示していないが古式土師器が出土している所からＣ区との関連する溝である。

現在の大泉坊誓願寺はかなりの盛土で南側斜面を埋めているため，従来の斜面部分は不明である。Ａ区の様に地山整形して誓願寺関連の遺構が存在していたものと思われるが調査区外のため確認できなかった。

井戸（ＳＥ－03）

調査区の中央部左側のＳＤ－03を切る形でＳＥ－03がある。径は1.2m で深さは1.2mの小さな井戸である。ほぼ垂直に近い状態で掘り切っているが内部施設は何も検出できなかった。遺物は Fig. 9－1，4で時期も13～15世紀のものが主であった。

掘立柱建物（SB－02）

１×１間の確認しかできなかったが調査区外に延びる可能性がある。柱間は1.8m である。

不明土壙（SX－03，04）

調査区の西南隅に1/4弱検出したＳＸ－03は出土遺物がない。皿状になる形状を示す所はＳＥ－01部分と同様であるところから井戸の可能性もある。調査区外のため確認することができなかった。直径４m 前後のものと考えられる。ＳＸ－04は隅丸長方形に近い形状を呈するがこれも半分以上調査区外のため，その実態は不明である。約50cm程度の深さを持ち，だらだらと深くなる形状を示す。幅は1.6m，調査区内での長軸は2.5m を計る。同じ様な形状をもつＡ区のＳＸ－02も同様のことがいえる。

Pit群

Pit群は調査区の西側に集中して検出された。不整形のPitがその大半を占める。その中で遺物が出土したPitは数個である。その内Fig. 9－2が Pit－4，3が Pit－7から出土した。

C区の遺構

C区からは溝とPitのみである。2.5mの流土があったため，かなりの日数が必要であった。調査範囲が狭いため遺構の確認ができなかった。ＳＤ－06は東側から端を発し，南側に向けてしだいに深くなる形状を呈する。幅0.5m，深さ0.2mである。

3．遺　物

Fig. 9，10の遺物は図示できるもので他の遺物はそのほとんどが細片のため図示することができなかった。またC区の遺構上面に包含層が確認されたが10cm程度で遺物も細片である。このため図示できなかったが，すべて古式土師器である。

Fig. 9－1はSE－01より出土した。鍋の胴部で瓦質土器である。表面には煤が付着し，かなり脆くなっている。内面はヘラミガキとハケ目を呈し，表面はナデとハケ目で仕上げている。

2はB区Pit－4より出土した糸切皿である。口径11.2cm，器高2.2cmを計る。 3はＢ区Pit－7より出土した特小皿で口径4.8cm，底径3.8cm，器高1.6cmを計る。 4は，Ａ区ＳＥ－01上面より出土した火舎である。内外面とも黒灰色を呈する。口縁下に三角突帯を張付け，口縁部と突帯の間にスタンプを押す。5は，A区の遺構検出時に出土した龍泉系青磁碗である。6も同様にB区から出土したもので龍泉系青磁碗（博多出土貿易陶磁分類表によればⅠ類になる。）である。29はＳＥ－01から出土の口ハゲの白磁である。分類表によると平皿の2と同形式を呈する。7，8はC区の包含層中より出土したものでこのほかにも須恵器30点ほど出土している。7は須恵器の蓋で口径17.0＋α cm，器高1.8cmである。 8は高台付碗と思われ，口径17.0cm，器高4.4＋α cmを計る。 9～11はC区の包含層より出土した土師器である。 9は甕形土器で胴部に大きなタタキがあり5条を1単位として逆くの字形に施文している。10は甑の把手である。11は口径19.0cm，現高14.5cmを計る。全体にヘラ削りの後ナデ仕上げである。12はB区のＳＤ－05より出土した玄武岩製の砥石である。玄武岩は砥石に使用しているのは珍らしい。13，14はC区包含層より出土した黒耀石の剥片である。13は折断されている。15～17はC区包含層より出土した鉄鏃である。18はSD－04より多量の瓦とともに出土した鬼瓦の剥片である。図示した都地館跡のものは，出土遺物の鬼瓦の部分を示しただけである。都地のものとは口，歯等が異なっているようである。Fig.10－19～21はＡ区ＳＥ－01の底面から出土した平瓦である。今回の調査で軒丸・丸瓦が出土していないのが残念である。3枚とも表裏面に調整の痕跡はなく，面取りが行なわれている程度である。この3枚はＳＥ－01で井戸枠として使用された

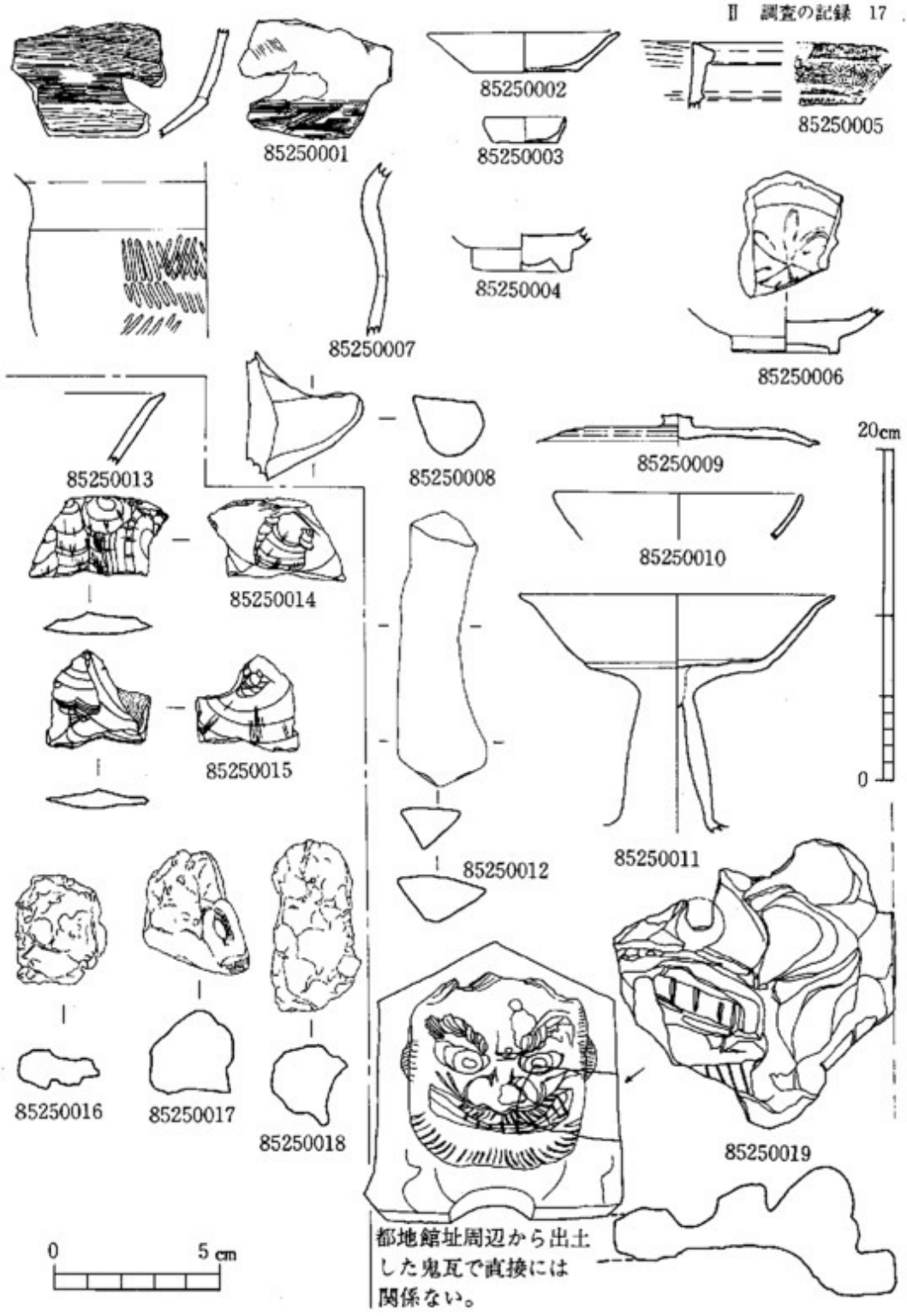


Fig. 9 今津出土遺物 (縮尺 1/2, 1/4)

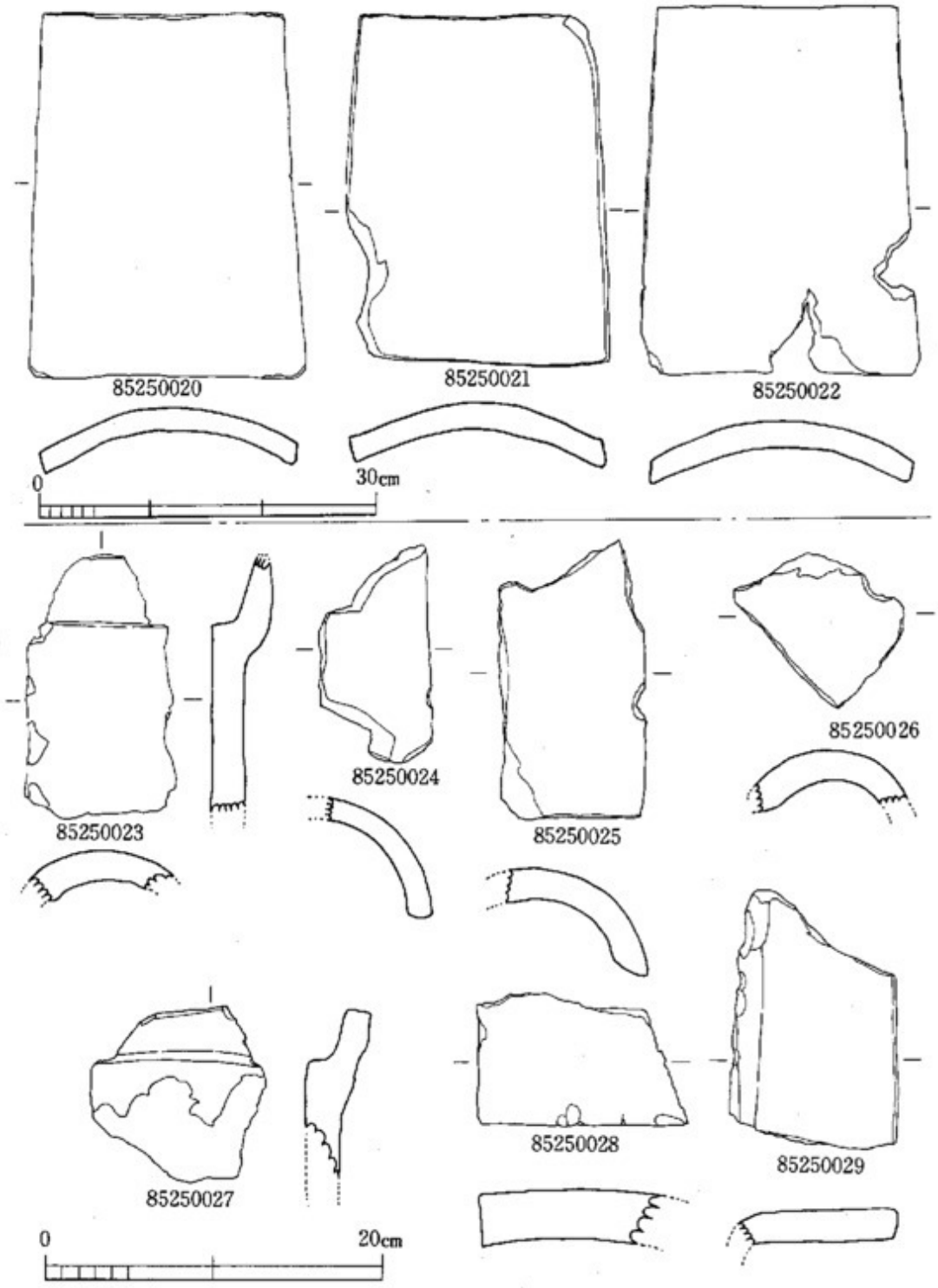


Fig. 10　今津出土瓦実測図　　(縮尺 1/4・1/6)

もので転用品であろう。22はB区SD－04の上面出土の丸瓦である。焼成が不良のため残り具合も悪く表面の調整は不明。内面はわずかに布目痕が残っている程度である。23も22と同様にSD－04からの出土品で復元口径13cm，器高6.5cm，焼成はやや不良である。表面に縄目のタタキが一ヶ所だけ残っている丸瓦である。24～26まではSD－05からの出土である。25の表面はケズリの後ナデで仕上げ，内面は1.5cmの間隔の紐状痕跡と布目痕が残る。復元半径13cm，6.5cmの器高で焼成は普通。24は復元半径14cmの丸瓦である。表面は丁寧なヘラミガキにより仕上げている。内面は竹間状の半円が連続している。その上からムシロ状の痕跡がある。焼成はやや不良である。26は表面がかなり剝落しているため調整方法等は不明である。27，28はSD－04から出土している。27は非常に堅く焼きしまり面取りが直角に近い形態を示す所から熨斗瓦と考えられる。28は重要な所が欠損しているが隅切り瓦と考えられる。

図示した遺物は出土遺物のほんのわずかである。土師器，須恵器，瓦等が多量に出土したが細片があったり，同様の形態を示すところから代表的な遺物を図示した。これらとは別にA区のすぐ上に今津古墳群C群がある。また昆沙門山東側海岸に良質の滑石の露頭を発見した。詳細に調査しなければならなかったが，時間におわれる調査であったためできなかった。今回の調査では滑石製の遺物はまったく認められない。石鍋等出土を予定したが出土しなかった。入念に調査すれば長崎県の石鍋製造址と同様の遺構を発見できるかもしれない。今宿五郎江遺跡，青木遺跡などで多量の滑石製石錘が出土しているところから石材分析等もする必要があると思われる。

小　結

板屋遺跡の縄文早期の溝やピット状遺構などを標高550m前後の斜面部分に作り生活していた人々は狩猟生活，採集生活の一つの場所として選んだものと思われる。現在でもイノシシ，サル，ヤマメ等の動物性のタンパク源は豊富であることからこの場所に生活しキャンプを行なった人々が数多くの遺跡を残していることと思われる。板屋，背振周辺は分布調査がいきとどかないところで，またかなりの土砂の流出によって遺構面まで深い所が多い。背振山頂には平安時代の経塚，経筒等の検出があるが実際の数等は確定できないでいる。

今津遺跡は分布地図では今津B遺跡である。しかし今津の中で誓願寺の42坊の発見を考えた時に全体の把握できる遺跡名と考えた。

今津遺跡の今回の調査は調査幅が狭いこともあって山裾側のトレンチ掘りの感がある。しかし今回の調査で鎌倉時代から室町時代にかけての遺構，検出，古墳時代遺構の発見，今山とは別の玄武岩の露頭，滑石の露頭面の発見と数多くの成果を上げることができた。特に誓願寺とのかかわりで非常に重要な遺跡であることが判明した。この地を数多く調査を重ねることに

20 小　結

より港の位置，42坊の所在等が明らかになると確信する。

遺物からみるとC区の古墳時代の遺構と13～14世紀の遺物がほとんどで特に瓦を持つ建物の存在，井戸枠に瓦を使った状態，SD－04，05に見られる多量の瓦出土状態から瓦を葺いた建物の存在を考えることができる。これは大泉坊誓願寺における13～14世紀の瓦の可能性が高い。

引用・参考文献

今津	今津小学校創立百周年記念	1975，柳田純孝
中・近世土器の基礎研究	日本中世土器研究会	1985
太宰府条坊跡Ⅱ	太宰府市教育委員会	1983
太宰府史跡	九州歴史資料館	1983
三宅廃寺	福岡市教育委員会	1979
博多（Ⅰ）	福岡市教育委員会	1984
有田・小田部７集	福岡市教育委員会	1984

図　　版

PL. 1

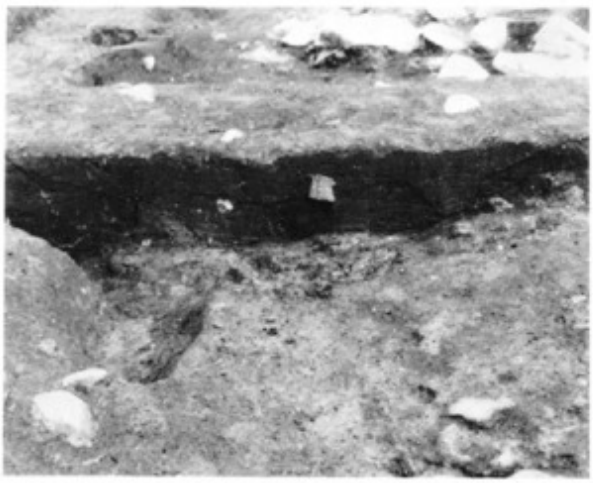
板屋調査開始前の全景（南から）

遺跡全景　（南から）

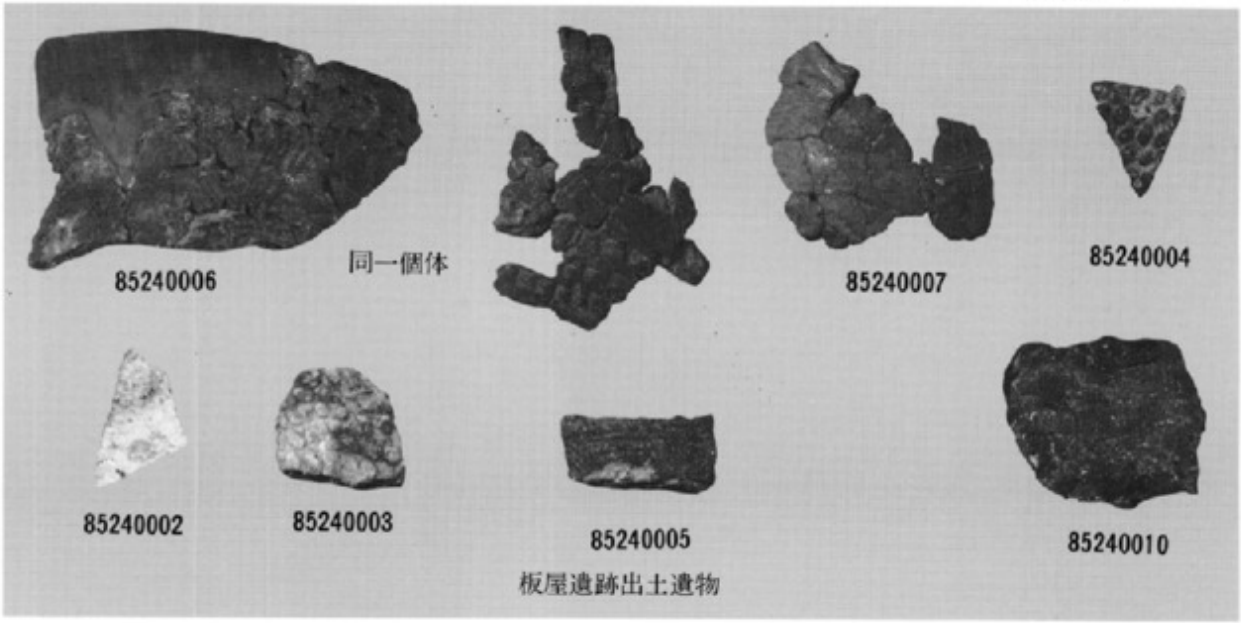
SD－01　全　景　（北から）

東壁土層状態　（西から）

SD－01　土層状態　（南から）



SD－01　土層状態　（南から）



板屋遺跡出土遺物

今津遺跡遠景

毘沙門山

今津遺跡遠景

今津滑石原産地遠景

毘沙門山の東の山麓から海岸へ急激な斜面部分に滑石の原産地発見

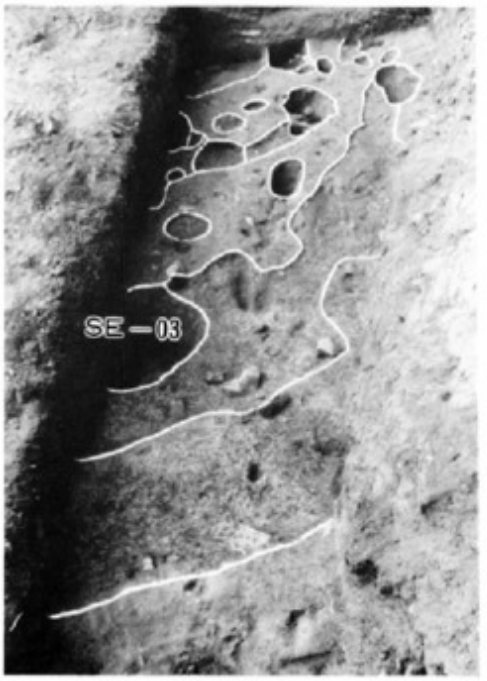
今津滑石原産地近景

今津A区全景　（東から）

今津A区溝　（西から）

今津A区全景　（西から）

今津B区Ⅱ全景　（東から）



今津B区Ⅰ全景（東から）

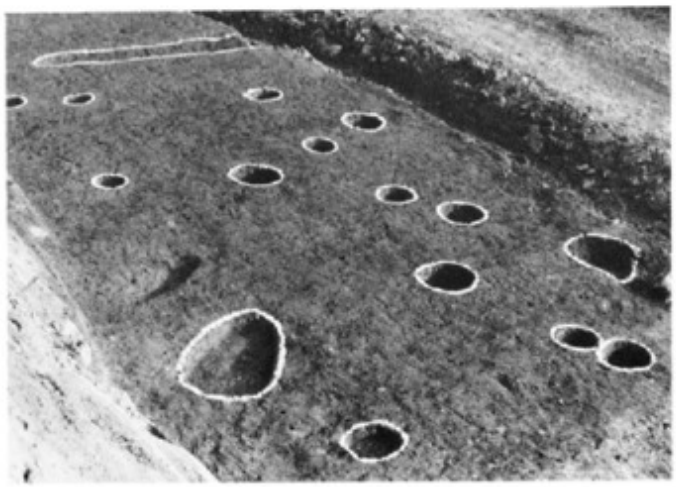
SE－01　遺物出土状態　（西から）

SE－01土層　（西から）

SE－03　検出状態　（東から）

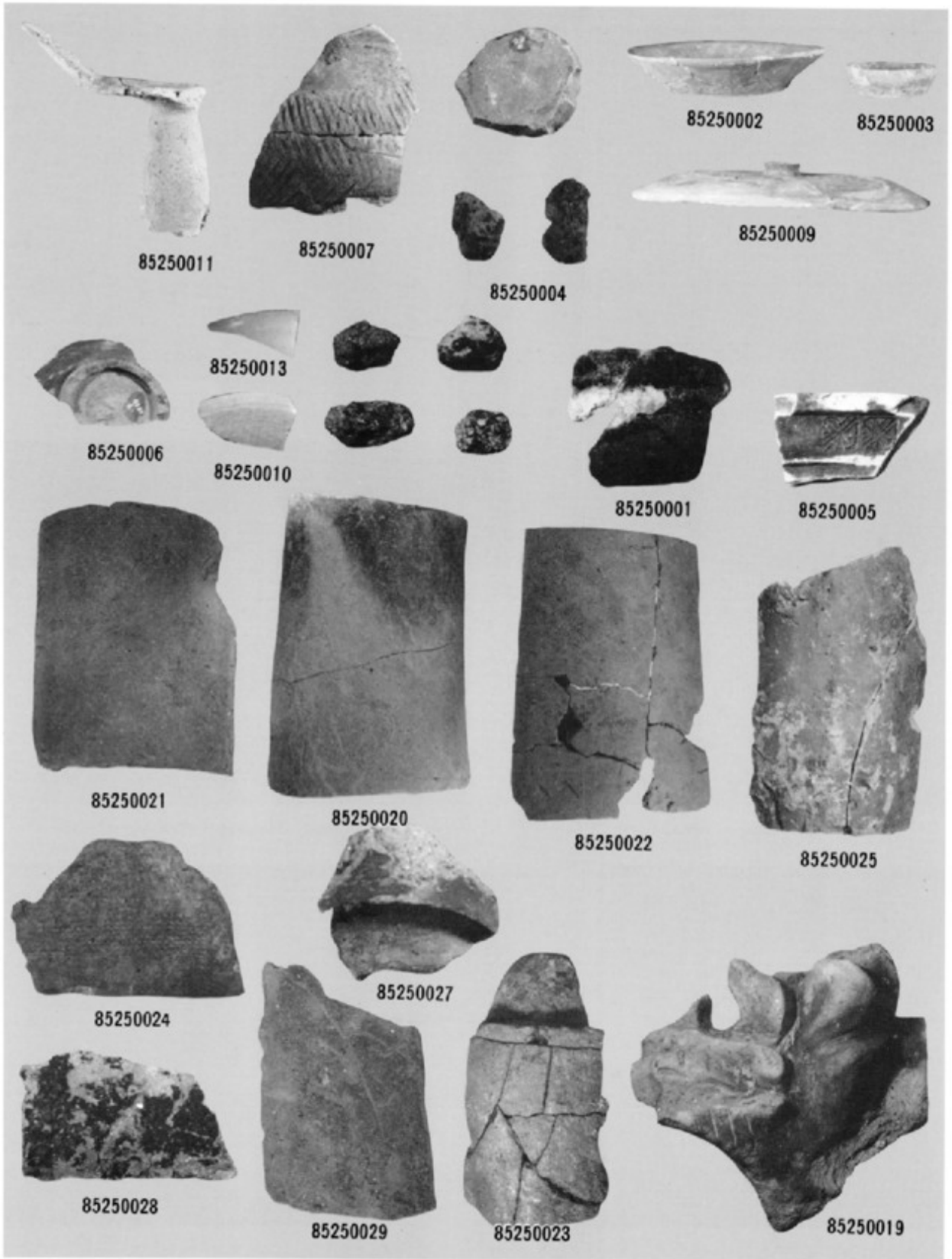
SE－01　完掘状態　（北から）

C区全景



C区Pit 検出状態

PL. 5



今津遺跡出土遺物

福岡市
板屋今津遺跡
福岡市埋蔵文化財調査報告書第166集
昭和62年 3 月 31 日
発行　福岡市教育委員長
印刷　玉川印刷（株）